



〈研究〉幕政ノ崩壊ト明治産業ノ開始(2)

石澤, 久五郎

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 24(6):895-912

(Issue Date)

1918-06

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052895>



研究

幕政ノ崩壞ト明治産業ノ開始 (其二)

ドクトル、オプ、
フ井ロソフ井

石澤久五郎

四

經濟發達ノ大勢ヨリ觀察シテ、早晚崩壞セザルベカラザルノ素因ヲ一時内部ニ包メル徳川幕府ハ黒船渡來ノ刺激ト尊王攘夷論ノ勃興トニヨリテ遂ニ倒レタリ、而シテコノ局面打破ノ衝ニ當リタルモノハ當年ノ青年士族ナリキ。同時ニ彼等ハ王政維新ノ建設ニ着手セリ。明治ノ産業發達史ハコ、ニ始マル、而シテソノ叙説ヲ始ムルニ先立チテ一徳川幕政時代ニ於ケル經濟政策及ビ經濟思想ノ要論ニ一瞥ヲ加ヘ、更ニ二徳川幕府ノ締結セル、而シテ明治ノ産業發達ニ影響シタリシ通商條約及ビ三新時代ニ繼承セシメタル新産業ニシテ幕末時代ニ移植セラレタルモノニ關シ概説スルハ無用ニアラザルベシ。

サテ徳川幕政時代ニ於ケル經濟思想ハ略シテ云ハバ消極的ナリ、自覺的ナリ、而シテ支那ノ經濟思想ニ負フトコロ甚ダ大ナリ。思フニ我等人間ノ經濟的行爲ハ欲望ヲ至要ナル動機トナスモノナリ、從ツテ欲望ノ増進ハ經濟的發達ノ根本原因タルベキナリ。コノ故ニ泰西ノ經濟學者ハ欲望ノ増進ヲ抑ユルコトナキモ支那ノ經濟思想ハ寡欲ノ美德ナルヲ教ヘ自ラ足ルヲ知レト教ヘタリ、即チ孟子ノ「養

心莫善於寡欲、其爲人也寡欲、雖有_二不存焉者_一多矣、其爲人也多欲、雖有_二存焉者_一寡矣」(盡心下)ト言ヒ、荀子ノ「天下害生_二縱欲_一、欲惡同物、欲多而物寡、寡則必爭矣」(富國篇)ト論ジタルハコレナリ、而シテ老子ノ「知足者富」文ハ「知足常足」ト説ケルハ更ニ一步ヲ進メタルモノナリ。サレハ徳川時代ニ於ケル節欲自足主義ハ支那ノ經濟思想ヲ繼承シタルモノニテ自給自足主義ノ農業經濟時代ノ適合シタルモノナルト共ニソノ經濟觀ヨリモ倫理觀ノ重要視セラレタルモノナリ。而シテ徳川時代ニ於ケル學者ハ概シテ人欲ヲ去ルコトニ勉メタリ、即チ蕃山ノ「人心ハ形氣ノ心ナリ、此形アレバ、聖凡共ニ同ジ、飲食衣服男女等ノ心是ナリ、形氣アレバ欲アリ、欲アレバ則アリ、則ハ禮儀ナリ、人心欲アリト云ヘトモ、禮儀ノ天則ニシタガフトキハ道ナリ、天則ニシタカハザルトキハ人欲トナリテ惡ナリ」ト云ヘルハソノ一例ナリ。更ニ徳川時代ニ於ケル經濟思想ヲ研究スルニアタリ、留意スベキコトハ封建制度トノ關係ナリ、何ントナレバ當時ノ經濟思想ハ封建制度ヲ基礎トシ又出立點トシテ何事ヲモ考ヘタレバナリ。封建制度ハ自給自足ノ農業經濟ニ基礎ヲ置キタル軍國的武斷政治ナリ。武士ト農民トノ生活ノ基礎ヲ同フスルノ政治ナリ。武士ハ農業經濟ノ消費者タルニ引キカヘ、農民ハ農業經濟ノ生産者タルモノナリ。コノ故ニ徳川時代ニ於ケル有司モ、學者モ皆ニ農業ヲ本業トシテ重ンジタリ、從ツテ商工業ノ如キハ末業トシテ輕ンゼラレ武士ノ氣質ニ適合セザルモノトシテ賤メラレタリ、三浦梅園ノ「農減ズレバ財減ズ、財減ズレバ國本薄シ」(價原ト説キタルハ農ヲ以テ財ノ本源トナシタルモノニテ尊農論ノ基礎ナリ。荻生徂徠ノ「商人ハ不定ナル渡世ヲスル者故ニ商人ノ潰ル、事ヲバ嘗ツテ構フマジキ也」(政談)ト言ヒ、佐藤信淵ノ「商賣ハ嚴シク其勢ヲ挫カズンバアル

ベカラズ、宜シク交易ノ權柄ヲ悉ク取上ゲテ國君ノ持チトナシ、問屋ヲバ皆此府（融通府ニシテ信濃ノ考案セル六經濟機關ノ一ナリ）ノ下輩役人トシテ使ヘシ（經濟提要）ト論ジ、又能澤蕃山ノ「士民ハ天下ノ本ナリ、其本困窮スレバ亂ニ及ブベシ」商人出家ナド安樂ヲ願フトモ得ベカラズ」ト説キタル、皆商工業、殊ニ商業ヲ賤ミタルモノナリ。而シテ此等ハ支那ノ經濟思想ニ誤マレル商工業ノ生産及經濟ニ於ケル重要ナル職分ヲ甄別シ能ハザリシニヨレリ。如斯ニシテ消費者タル武士ハ生産者タル農民ニ依ルノ外、生活ノ道ナカリシヲ以テ農民ヲ保護スルノ政策ヲトレリ、同時ニ（五）「農モ亦國法ノ備ハラザル舊時代ニアリテハ強者タル士ノ保護ニ依賴セザレバ、其ノ生ヲ聊ンズルコト能ハザルヲ以テ已ムコトヲ得ズ、之ニ服從シ、因襲ノ久シキ識ラズ知ラズ主從ノ關係ニ甘受スルニ至リシナリ」。即チ農民ハ自給自足ノ農業經濟ニ其一生ヲ托スルモノナルノ故ニ常ニ天然力ニ支配セラル、コト大ナルヨリ從順ハ彼等ノ第二ノ天性ナリ、而シテコノ從順性ハ武士階級ノ保護ヲ得、ガ爲メニ武斷政治ノ壓迫ニモ堪ヘ得テソノ生業ニ從ヘリ、言ヒ換フレバ自給自足ノ農業經濟ニ満足シテ一般人民ノ大多數アル農民ハ武斷政治ノ下ニ服從的道德ヲ強ヒラレナガラ、ソノ生業ヲ營メリ、カクシテ權力ヲ握レル武士階級ハ高壓的ニ人民ニ蓋ミテソノ尊敬ヲ強要シ、官尊民卑ノ陋習ヲ作り、人民ニシテ獨立自主ノ精神ヲ養フノ餘地ナカラシメタリ。從ツテ彼等ハ自己存在ノタメニ生活スルヨリハ武士階級ヲ維持セシガタメニソノ生業ニ勤メタルモノナリキ。カクテ徳川時代ニ於ケル一般人民ノ思想ハ自立自尊ノ考ナク、自由自活ノ精神ナク、共同生存ノ念明ナラズ、只管武士階級ヲ以テ自己存立ノ眞義ナルモノト固ク信ジ、コレニ賴リテ他動的ニ生活ヲ享樂シ自己個性ノ價值ヲ認メザル服從的道德觀ヲ以テ滿サレタ

リキ。而シテコノ服從の道德觀ハ國民の習性トナリテ明治ノ産業國民ニ傳來セリ。又農本主義ノ經濟思想ハ當然ノ論理トシテ米穀ヲ重ンジ、金錢ヲ輕セリ、何ントナレバ米穀ハ百姓生存ノ基礎ナルモ、金錢ハタゞ方便タルニ過ギズト考ヘタレバナリ、更ニ詳言スレバ米穀ハ糧食トシテ飢饉ノトキニ於テノミナラズ、國家有事ノ日ニ於テ必要缺クベカラザルモ、金錢ハ資料トシテサマデ重要ナラズト考ヘラレタリ。又コレト同時ニ徳川時代ニアリテ節儉ハ美德トシテ獎說セラレタリ。コレ一面ニ於テ寡欲又ハ節欲ノ道德觀ヨリ出デタルモノニテ武士及ビ農民ノ生活狀態ヲ維持スルニ必要ナリシト、他ノ一面ニ於テ奢侈ハ武士階級ノ士氣ヲ軟弱ナラシムルモノナルニ、節儉ハコノ弊ナキノミナラズ、節約ニヨリテ得タル財ヲ有事ノ日ニ必要ナル用途ニ轉ジ得レバナリ、更ニ節儉ノ獎說セラレタル根本原因ハ武士階級ガ不生産者トシテ、ソノ生活ヲ農業經濟ニ仰ギタリシノ事情ヨリ、所得ノ一定シテ増加ノ餘地ダニコレナカリシガタメニ節儉ノ必要ヲ感ゼシメタルノ心理作用コレナリ。加フル徳川幕政時代ニアリテ武力維持ノ必要ナク人口ノ増加ヲ喜ビタリ、コノ人口ノ増加ナクシテハ武備ヲ張り、農耕ヲ勵マシ得ザリシヨリ人口ノ増加ツノモノガ消極的ナル經濟生活ニハ一ノ壓迫ナリキ、而シテソノ當然ノ結果トシテ節約ノ獎說セラレザルヲ得ザリシナリ。然レドモ漸次ニ都會生活ニ慣レ行ク徳川中世以後ノ武士階級ニハ節儉モ漸ク行ハレザルニ至リ、ソノ直接ノ結果ハ武士階級ノ困憊ナリキ。

註(五) 瀧本誠一氏「日本經濟學說ノ要領」九十八頁

如斯、封建制度ノ維持ヲ目的トセル農本の經濟思想ハ、當時ノ學風トシテ支那經濟思想ノ影響ヲ受クル大ナルモノアリシニモセヨ、時代ノ要求ニ刺激セラレテ徳川幕政時代ニ發達セルモノナリシガ故

ニ幕府又ハ諸侯ノ執リタル經濟政策ハミナ封建的軍事上ノ觀念ヨリ割出シタルモノニテ、各自ソノ立場ヨリ農業ヲ保護シテ封建制度ヲ維持セントスルモノニアラザルハナカリキ。即チ（一）土地ノ賣買ヲ禁止シタルハ土地兼併ノ弊ヲ除キテ農民ヲ保護セルノ政策ナリ。（二）商工ノ村内ニ徘徊スルヲ禁止シタルハ奢侈ヲ防止シ、風教ヲ維持セント欲シタリシノミナラズ、又農民經濟ノ安全ナランコトヲ計リタルノ政策ナリ。（三）米價ハコレヲ高價ニ保タント欲セルモ、他ノ一般物價ノ騰貴ハ極力コレヲ低價ニ引下グントシタルハ農本經濟自然ノ要求ニシテ、武士階級及ビ農民ヲ保護セルノ政策ナリ。（四）大船ノ築造ヲ嚴禁シタルハ鎖國政策ト同ジク農業經濟ヲ基礎トセル封建制度ヲ維持スルニ必要ナルヨリ採リタルノ政策ナリ、何ントナレバ大船ノ航通ハ都市商工業ノ發達ヲ促ガシ間接ニ封建制度ヲ破壊スルモノナレバナリ。之ヲ要スルニ德川時代ニ於ケル經濟思想及ビ經濟政策ハ封建制度ノ維持ヲ眼目トシテ考慮セラレ、又立策セラレタル武士本位ノ經濟政策ニシテ、眞ニ農民本位ノ經濟政策ニハアラザリキ。言ヒ換フレバ農民ハ生産機關トシテ武士階級ニ利用セラレタルモノナリ。若シソレ賤シメラレタル商工業者ニ至リテハ、生産機關ニ屬スル附屬物ノ如ク思ハレタリシガ、德川中世以後ニ於ケル商工勢力ノ増進ハ逆ニ武士階級ヲ制スルニ至レリ、カクシテ國民經濟ノ發達ハ武士階級本位ノ經濟ヨリ國民本位ノ經濟ニ進ムニ至レリ、明治產業ノ開始ハ即チコレナリ。

五

德川時代ニ養成セラレタル經濟思想及ビ釀成セラレタル國民的習性ハ直接ニ明治產業ノ發達ニ緊切

ナル關係ヲ有シタリシガ如ク、徳川幕府ガ、ソノ季世ニ於テ諸外國ト締結シタリシ通商條約ハ事實上稅權ノ拘束トナリテ日清戰爭前後ニ至ルマデ拘束力ヲ有シタリシヲ以テ明治産業ノ發達ニ何等カノ影響ナクンバアラザリシナリ。コノ故ニ此等諸通商條約ノ締結事情ニツキテハ殊ニ叙説スルノ必要ヲ見ザルモ、此等條約ノ性質及ビ關稅稅率ノ如何ニツキテハソノ要領ヲ指示セザルベカラズ。

我國ト和蘭及ビ支那トノ間ニハ早クヨリ長崎ニ於テ交易ノ行ハレタリシモ、ソハ極メテ限局的ノモノナリキ、コレ徳川氏ノ執リタル鎖國政策當然ノ結果タリシナリ。サレバ一般的貿易ノ開始セラル、ニ至リシハ幕末ニ起リタルノ事實ニシテ嘉永七年以後ナリ。即チ其年三月三日(十一月ニ安政ト改元セリ)始メテ米國ト修好條約ヲ締結シ十八ヶ月後ニ下田及ビ函館ノ開港ヲ爲セリ。八月英國ト修好條約ヲ締結シ次イテ十二月、魯國和蘭及ビ佛蘭西ノ三國トモ英米兩國ノ例ヲ追フテ同シク修好條約ヲ締結セリ。コレヲ下田ノ五ヶ國和親條約ト云ヒ一年有半ノ後ニ批准ヲ交換シ原條約ヲ増修スベキト約セリ。而シテ該條約ニヨリ貿易ハ下田、長崎及ビ函館各港ニ於ケル運上所ノ仲介ヲ經ベキモノニテ商人隨意ノ貿易ニハアラザリシト同時ニ、各條約ニハ片務的最惠國條款ノ項目ハ加ヘラレタリ、即チ「日本政府外國人ヘ當節亞墨利加人エ不差免候廉相免候節ハ亞墨利加人エも同様差免可申右につき談判猶豫不致候事」(未巳條約第九條)、又ハ「此度約する兩港之外今より後外國ヘ差免することあらば其國と同様貌列太泥亞船民にも可取扱事」(英國條約)、或ハ「日本國有所允乎他邦亦順同時允諾魯西亞」(魯國條約)等ノ條文アルコレナリ。既ニ幕府ハ開港ヲ許シテ修好條約ヲ結び、且ツソノ増修ヲ約束シタルノ結果トシテ、安政四年八月二十九日和蘭條約附録ニ調印セリ。コレ實ニ我國ガ締結シタル通商

條約ノ嚆矢ニシテ四十ヶ條ヨリ成リ、出島ニ於ケル和蘭商人ノ制限ヲ緩ヘタルヨリナリ、而シテソノ第二條ニ於テ積量ニヨリ船稅ヲ規定セリ、即チ(六)「商船入津の節積量一噸に付(日本之六石四斗)銀五匁、百五十噸以下は一噸に付銀一匁づゝ之割合を以て入津當日より二日之内に船稅可差出候事」トアルコレナリ。如斯、該附錄ハ最初ノ通商條約ナリシニモ拘ラズ、政治問題トシテ朝廷ト幕府トノ間ニ葛藤ヲ生ゼザリシ一半ノ原因ハ開港場之長崎及ビ函館ニ限リテ次イデ締結セラルベキ日米條約ノ如ク六港ヲ開キ京都ニ近キ兵庫港ノ加ヘラレザリシコトコレナリ。安政四年四月十五日ハルリス總領事トシテ江戸ニ來リ、二十一日將軍ニ謁シ國書ヲ捧呈シ、且ツ前條約ノ改修ヲ要求セリ、カクテ談判ハ其年ノ暮ヨリ翌五年ノ初頭ニカケテ續行セラレ江戸條約案ナルモノ成立セリ。於是幕府ハ林大學頭津田半三郎等ヲ遣ハシ案ヲ具シテ勅許ヲ奏請シタリシモ朝廷攘夷ニ傾キタリシヲ以テコ、ニ朝幕ノ間ニ大衝突ヲ生ジ、堀田閣老ノ遊說モ遂ニ効ヲ奏セザリシヨリ調印ノ延期ヲ乞フノ已ムナキニ至レリ。已ニシテ井伊直弼ノ大老職ニ就クヤ内外ノ形勢ニ動カサレテ、安政五年六月十九日勅許ヲ俟タズシテ江戸條約案ナルモノニ調印セリ、世コレヲ假條約ト呼ビ、十四ヶ條ニシテ添フルニ貿易章程七則ヲ以テセリ。ソノ要領ヲ略スレバ第一條ニ於テ江戸ニ外交官、各國港地ニ領事ヲ置クコトヲ約シ、第三條ニ於テ下田函館兩港以外ニ神奈川(下田ハ神奈川開港六ヶ月ニシテ閉ヅベシ)長崎新潟及ビ兵庫ノ四港及ビ江戸大阪ノ兩都ヲ開キ且ツ其等ノ各地ニ居留地ヲ置クコトヲ許シ、第六條ニ於テ治外法權、即チ領事裁判ノコトヲ規定シテ我が大利權ニ制限ヲ加フルヲ承諾シ及ビ第八條ニ於テ居留地ニ禮拜堂ヲ設クルコトヲ許シ、第十三條ニ於テ該條約ハ締結後百七十一ヶ月即チ千八百七十二年七月四日以後兩政

府ノ合意ニヨリ一ヶ年前ニ互ニ通達シ改正シ得ベキコトヲモ規定セリ、而シテ(七)仮ニハ帝國領土内ニ外國人ノ駐在ヲモ餘儀ナクセラハ、ニ至レリ。更ニ貿易章程第六則ニ於テ通港手數料即チ入港手數料十五弗、出港手數七弗及ビ其他種々ノ手數料ヲ一弗半ニ規定シ、第七則ニ於テ輸入税ヲ左ノ如ク規定セリ。

第一類

貨幣ニ造リタル金銀并ニ造ラサル金錢、當用ノ衣類

家財并ニ商賣ノタメニセサル書籍

何レモ日本居留ノタメニ來ル者ノ所持ノ品ニ限ルベシ

(在留役人自用ノ飲食、家財并ニ書籍、コノ品モシ賣拂フトキハ定ノ運上ノ納ムベシ(蘭))

右之品ハ運上ナシ

第二類

凡ベテ船ノ造立、網具、修復或ハ船裝ノタメニ用ユル品々、鯨漁具ノ類

鹽漬食物ノ諸類

「パン」并ニ「パン」ノ粉

生キタル鳥獸類

石 炭

家ヲ造ルタメノ材木、米、穀、蒸氣ノ機械、「トタン」、鉛、錫、生絹

(木綿(英、佛))

(リンネン(普))

(羊毛ノ織物(英、佛))

右之品々ハ五分ノ運上ヲ納ムベシ

第一類

都テ蒸餾或ハ釀シ種々ノ製法ニテ造リタル一切ノ酒類

第二類

右ハ三割五分ノ運上ヲ納ムベシ

第四類

凡ベテ前條ニ舉サル品々ハ何ニ寄ラズ二割ノ運上ヲ納ムベシ、金銀貨幣并ニ樟銅ノ外、日本產ノ物積荷トシテ輸出スルトキ

ハ五分ノ運上ヲ納ムベシ

〔米并ニ麥ハ日本逗留中ノ需用ノタメニハ與フトモ積荷トシテ輸出ヲ許サズ、〔英、佛〕〕

〔英船積荷ニシテ陸上ケセザル外國ノ穀物ハ故障ナク再輸出ヲ許ス、〔英、佛〕〕

〔日本ニ産スル銅ハ日本需用ノ餘分アレバ其時ノ公ケノ入札ニテ賣渡スベシ、〔英、佛〕〕

古者神奈川開港(即チ千八百五十九年七月四日)後五ヶ年ニ至リ日本役人ヨリ談判次第入港出港ノ稅則ヲ再議スベシ、

備考

註(六)

噸稅ハ一噸ニ和蘭通用金ニテ「五マース」即チ八十「セント」ヲ入港ノ後二日ノ内ニ拂フベシ、百五十噸以下ノ船ハ一噸ニ「一マース」即十六「セント」ヲ拂フベシ

「一マース」ハ六錢四厘五三二八

五「マース」ハ三十二錢二厘六六四

「セント」ハ四厘〇三三三

(大日本租稅志卷三十、一枚ヲ)

註(七)

外國兵ノ帝國領土内ニ駐在セル事實ハ次ギノ如シ、
文久三年五月十六日幕府ハ内外ノ事情ニ促サレ酒井飛驒守ヲ横濱ニ出張セシメ英公使等ノ要求ニカ、ル外兵ノ横濱駐屯ヲ許セ

リ(同上 三八七頁)、

文久三年九月朔日、幕府ハ書翰ヲ發シテ日本政府ノ費用ヲ以テ横濱ニ外兵駐在陣營ヲ建築スルノ約ナ興ヘタリ(同上三九一頁)、

元治元年十月朔日英人レストルヨリ屯所假建築ノ圖面ヲ神奈川奉行ニ進達シ奉行ハコレヲ江戸城ニ送付シ、同五日建築スベキ

ノ指令ヲ得タリ『コノ設計ニヨレバ兵卒屯所、煮焚所、洗濯場其他ヲ合シ三十一棟ニシテ此費用ハ九十兩餘ナリトス』(然ル

ニ其落成シタル地坪ハ總督住居、火藥庫、病院等ヲ合セテ一萬九千百八十九坪、建坪四千五百九十三坪、棟數三十餘ニシテ其

費用實ニ五萬三千五十一兩當代ニアリテハ適當ノ美觀ヲ備ヘタル規模宏大ノ地ヲ構成セリ)(同上 三九一―九二一頁)、

『屯兵ノ數ハ時ニ増減セシガ如クナルモ當時水兵一千人ニシテ此外五百人近日渡來スベシトハ英公使ヨリ幕吏ニ告ケシ所』云々

慶應元年七月英公使ハ幕府ノ同意セザリシニモ不拘、香港駐在ノ陸軍第十一番隊ノ一部及ビ第二十番隊ノ一部ヲ横濱ニ近イテ

駐屯セシメタリ(同上 三九二―三三頁)、

『明治元年六月武器ヲ携ヘタル日本人横濱市中ニ往來シ、周圍ノ形勢穩カナラズ、其警衛ヲ日本政府ニ依頼スルモ心元ナシトノ

議各國使臣ノ間ニ起リ彼我協定ノ上左ノ場所ニ外國兵若干ヲ配置セリ

一、裁判所面所會所

一、本道ノ中央

二、本町通ト稱スル日本

一、同所北方ノ街端市街ノ中央

(横濱開港五十年史上卷三四二頁)

『明治四年六月二十一日、英國陸兵解成シタルニ、海軍ハ尙依然トシテ屯在セリ』

『佛國市營ニ關スル事ハ記錄散佚シテ參考ニ資スベキモノナシ、文久三年五月谷戸橋際ニ海軍物置所ヲ貸與シ、爾後漸次増地シテ地坪三千四十二坪、屯所三棟(土藏一箇所ヲ合セ)此建坪日十九坪餘ヲ貸與シタルモノナリ、屯兵ノ數ハ明治四年十月陸兵二百人ナリシト雖モ其前後ノ狀況ヲ知ル能ハズ、屯所ノ規模固ヨリ英ニ及バザル遠シ兵數モ亦然リシナラン』

(同 三九三・三九四一頁)

明治二年十月以降特ニ明治政府ハソノ機會アル毎ニ英佛公使ニ對シ撤兵請求ヲ繼續セリ

明治五年八月ニ至リ佛國公使漸ク撤兵ヲ諾シ翌九月佛國撤兵ハ行ハレタリ(同上 三九六頁)

然ルニ英國ハ尙ホ撤兵ノ事ヲ諾セザリシガ、爾後三年ニ亘リ談判ヲ重ネル數次、明治八年三月ニ至リ英兵全部ノ撤退ヲ見ルニ至レリ(同上 三九六頁)

六

次イデ安政五年七月十一日魯西亞トノ修訂條約ニ、同年七月十八日英吉利トノ修訂條約ニ及ビ同年九月三日佛蘭西トノ通商條約ニ調印セリ、而ツテ此等ノ各條約ハ日米修訂條約ノ例ニ倣ヒタルモノナルヲ以テ概ネ大同小異ナリ、又同年七月十日英米佛魯ノ例ヲ追フテ和蘭トモ新條約ニ調印シタリシヲ以テ安政二年十二月三日ノ條約ハ補修セラレ、同四年八月二十九日ノ條約附録ハ全ク消滅シタリ。以上コレヲ安政ノ五ヶ國條約ト言ヒ居留地ノ設置ヲ認メ、海外法權ナル領事裁判ヲ許シテ我が司法權回復運動ノ爲メニ遠ク伏線ヲ置キタルモノトイフベク、完全ナル主權國トシテ儘ニ屈辱ナリ、シカシ(ハ)當時ニ於ケル國情ノ逼迫セルト封建制度ノ風習トシテ自家ノ領域内ニ罪ヲ犯シタル他藩ノモノハ之レヲソノ所屬藩ニ引渡スノ慣例ナリ、且ツ慶長以來西洋人裁判ノ先例アリタル等ヨリ治外法權ヲ認諾シ

タルハ己ムヲ得ザリシノ事トイフベシ、若シソレ關稅稅率ニ至リテハ通商條約ノ眼目ニシテ、通商國ハ何レモ自國ノ利益ヲ基礎トシテ協定ニ努ムベキモノナリ。故ニ稅率ノ協定ニ關シテハヨロシク自主的能動的ナラザルベカラズ。然レドモ當時產業國トシテ自覺ナキ日本ハヨク自主的のヨリ、能動的タル能ハザリキ、即チ他ヨリ餘儀ナクセラレタルモノニテ凡ベテハ沒我的受動的ナリキ、シカモ、尙ソノ稅率ハ我ニ不利益且ツ不對等ナルモノニハアラズシテ、締盟諸國ヨリノ輸入品ニハ概シテ二割ノ關稅ヲ課シ得タリシナリ。

コレハリスノ言ヒケン如ク輸出入稅ノ稅率協定及ヒ阿片煙草ノ輸入禁止ニツキテ米國ガ新ニ好意ヲ表シタルノ結果ナランモ、其後ニ於ケル攘夷熱ノ驚クベキ亢進ハ事變ヲ多クシ遂ニ不利益ナル狀態ニ陥ラシメタリ。已ニシテ萬延元年六月十七日ニ葡萄牙トノ條約締結アリ、同年十二月十四日ニモ普魯西トノ條約締結アリテ同年ノ終リニハ江戸ニ五ヶ國ノ公使館アリ、即チ米、英、佛、蘭及普ノ五國コレナリ。而シテ締盟國ハ七ヶ國トナレリ。カクテ安政ノ五國條約ニヨルトキハ外國貿易ノ爲メニ江戸ニ居留ヲ許サル、ハ西曆千八百六十二年(文久二年)一月一日ヨリ、大阪ニ居留ヲ許サル、ハ千八百六十三年(文久三年)一月一日ヨリノ約束ナリ、又新潟ハ千八百六十年(萬延元年)一月一日ヨリ、兵庫ハ千八百六十三年(文久三年)一月一日ヨリ開港セザルベカラズ、而シテ新潟ハ開港地トシテ不適當ナル場合ニハ他ニ變更スルノ約束アリタルモ、サシ當リ二都一港ノ開放ハ六ヶ敷問題トナレリ、何ントナレバ當時ノ事情トシテ攘夷論甚ダ盛ニシテ約束ノ履行到底覺束ナカリシニヨレリ。於是。安藤閣老ハマヅ萬延元年六月二十一日英公使ニ、同八月二十六日ニ佛公使ニ二都一港ノ開放五ヶ年ノ延期ヲ請ヘ

リ、而シテ彼ハコレガ爲メニハ或種ノ關稅々率ノ低減ニ應ズルノ意ヲ洩セリ。翌文久元年十月幕府ハ外國奉行兼勘定奉行竹内下野守、外國奉行松平石見守及ビ御目付京極能登守ヲ公使ニ任シ歐洲締盟六國ニ派遣シ延期ヲ請フノ全權ヲ委任セリ、十二月公使一行ハ英船ニ乘シテ歐洲ニ向ヘリ。公使一行ハマヅ英國政府ト談判ヲ開始シ二都二港ノ開港五ヶ年延期ノ許諾ヲ得ルノ報酬トシテ英國ヨリ輸入スル酒類玻璃器等ノ主要品ヲ五分稅品中ニ加ヘ、且ツ横濱及ビ長崎ノ開港地ニ納屋ヲ取立ツルコトノ倫敦覺書ヲ作レリ、コレガ爲メニ三割五分稅品及ビ二割稅品ハ率ネ五分稅品中ニ含マル、ニ至レリ。次ギニ和蘭ヲ訪問シ又普魯亞ニ行キ何レモ延期ノ承諾ヲ得タリ、ソレヨリ露西亞ノ承諾ヲモ得、引返シテ佛蘭西ニ至リ葡萄酒並ニ織物類ノ稅ヲ五分ニ減ズルコトヲ約シ、轉ジテ葡萄牙政府ト交歡シテ歸朝セリ。カクテ、幕府ハコノ交渉ニヨリテ各國政府ヨリ一様ニ兵庫大阪及ビ新潟ノ開港ヲ千八百六十八年一月一日マデ五ヶ年間延期スルノ承諾ヲ得タリシモコレガ爲メニ輸入稅ノ輕減ニ忍バザルヲ得ザリキ。而シテ稅率ノ輕減ハコレニ止ラズシテ「其後馬關償金談判ニ因ツテ益々低率ノ改正ヲ促サレ遂ニ平均輸入稅五分以下ノ稅率ニ低減」セラル、ニ至レリ。コ、ニソノ事情ヲ述ベシ。慶應元年五月バークスノ新ニ英公使トシテ來任スルヤ、本國政府ノ訓令ニヨリ馬關事件ノ善後策トシテ償金ヲ受クルヨリハ兵庫大阪及ビ新潟ノ開港ヲ以テ急務トナセリ、時ニ將軍家茂征長ノコトヲ以テ大阪ニアリ、於是バークスハ米佛蘭ノ公使ト共ニ(一)安政條約ノ正式批准、(二)下關償金ニ引換ヘテ兵庫、大阪及ビ新潟開港ノ繰上ゲ、及ビ(三)現行關稅規則ノ改正ヲ要請スベク軍艦九隻ヲ率ヤテ大阪ニ到ラントセリ、阿部閣老コレヲ兵庫ニ迎接シ、ソノ來意ヲタゞセリ。カクテ幕府ハ兵庫ノ開港ハ懸案ナレドモ條

約ノ勅許アリシコト及ビ改稅ハ江戸ニ於テ協議スベキヨシヲ以テ答ヘタリ、於是彼等ハ再ビ江戸ニ歸航セリ、而シテコノ改稅談判ハ江戸ニ於テ開始セラレ、慶應二年五月十三日（千八百六十六年六月二十五日）各國公使トノ間ニ十二ヶ條ノ條約ハ締結セラレタリ。ソノ條約前文中ニ「日本慶應元年十月四ヶ國（英、米、佛、蘭）ノ名代人大阪ニ赴キシ折日本政府ヨリ輸入輸出ノ諸品却テ價五分ノ運上ヲ基本トシ右運上目録ヲ猶豫ナク改ムベキ趣キヲ約束シ」云々ノ一節アルヲ以テ當時已ニ幕府ハ各國公使ノ要請ニ堪ヘズシテ關稅ノ低減ヲ認諾シタルモノナリ、而シテ該改稅條約ハ神奈川ニ於テハソノ五月十九日（西曆千八百六十六年七月一日）ヨリ、又長崎及ビ函館ニ於テハ六月二十一日（同年八月一日）ヨリ（一〇）實施セラル、モノニシテ、ソノ新運上目録ハ輸入品運上目録及ビ輸出品運上目録ノ二表ヨリ成レリ。如斯ニシテ條約上一度得タル我が課稅權ハ大ニ減稅セラレテ一般ニ五分率ニ下レリ、而シテ事實上、日清戰爭前後ニ至ルマデ四分五厘ノ輕率ニ甘ンゼザルヲ得ザルニ至レリ。コレ幕末政治家ガ體面論ヨリ來ル眼前ノ苦境ヲ展開センガ爲メニ、通商條約ノ眼目タル稅權ノ保留ニ全力ヲ盡クサバリシノミナラズ、却リテ既得ノ稅權ヲ減殺シテマデモ、コレヲ一時的ナル緩和政略ニ餘儀ナク利用シタルニ原因スルモノナリ。コレヨリサキ文久三年（一八六五年）十二月ニ幕府ハ瑞西トノ通商條約ニ調印シ更ニコノ改稅條約調印ノ後、即チ慶應二年（一八六六年）六月ニハ白耳義ト、七月ニハ伊太利ト及ビ十二月ニハ丁抹トノ間ニ通商條約ヲ締結セリ。

サレバ徳川幕政時代ニ締結セラレタル條約國ハ十一ヶ國ニシテ、コレガ爲メニ我が日本ハ司法權ノ一部ヲ割キテ國內ニ領事裁判ノ成立ヲ認諾シ、更ニ條約上既得ノ課稅權ヲ減稅スベク餘儀ナクセラレ

タリ、從來コノ屈辱的ナル條約ヲ改正センガ爲メニ殆ンド三十年ニ亘ルノ耐忍ト努力トヲ要シタリキ。

註八) 吉田東伍博士 倒叙日本史第四册百四十三頁參照

註九) 徳川時代通史ニヨル、開國大勢史ニハ「日本ハ英國産出ノ織物等ニ對シ其輸入税ヲ五分ニ減スヘシトイフコトヲ以テ局ヲ結

ビ」云々トアリ、兩者ヲ記シテ再考ニ具フ 開國大勢史一〇七七頁

註一〇) 改稅條約ニヨリテ低減シタル輸入品運上目録次キノ如シ

第一種 有稅品、コノ種類ニ屬スル品目ハ八十九種ナリ、内二十餘種チアグ、凡ベテ從量稅ナリ、

一、明 礬	百斤ニツキ	銀 二文目二分五厘
二、檳 榔	同	同 六文目七分五厘
四、蠟 燭	同	同 三文目七分五厘
五、帆 木 綿 類	十碼ニツキ	同 同
六、卷 烟 草	一斤ニツキ	同 同
一〇、綵 綿	百斤ニツキ	同 同
一一、金 巾 類	十碼ニツキ	同 自一文目一分二厘至一文目六分八厘七毛五系
一二、唐 機 類	同	同 自二文目六分二厘五毛至三文目七分五厘
一八、木綿(ヨリ糸、片ヨリ糸)百斤ニツキ	銀 七文目五分	
二五、硝 子 板	一箱	同 五文目二分五厘
三九、麻 布 類	十碼ニツキ	同 三文目
四二、銅 並 青 銅	百斤ニツキ	同 七文目五分
四三、黃 銅	同	同 同
四四、熟 鐵	同	同 四文目五分
四五、鐵 塊	同	同 二文目二分五厘
四六、鉛 塊	同	同 十二文目
五〇、亞 鉛	同	同 九文目

六九、石	同	銀 七文目五分
七一、赤黒砂糖	同	同 六文目
七二、白砂糖	同	同 十一文二分五厘
七四、煙草類	同	同 十二文目
七六、羅紗類	同	同 自三文目七分五厘至九文目
八三、毛木綿交織物	同	同 自四文目五分至六文目七分五厘
十碼ニツキ		

第二種 無稅品

食料品及ビ荷物ノ運送ニ用フル諸獸類、碇並ニ鎖ノ碇綱、石炭、運上目録中ニ載セザル外國ノ衣裳、貨幣ニ作リタル又ハ作ラサル金銀、穀類、粉類、油糟、荷造ニ用フル筵、板木、鹽、鹽漬ノ食料、硝石、「ソロドル」、「タール」及ビ「チヤン」、茶製造ニ要スル鍋及ビ籠、茶、鉛、旅行中ノ荷物

第三種 禁制品 阿片

第四種 元代ニ隨ヒ五分ノ稅ヲ納ムベキ品

兵器并軍用諸品類、巴里斯品、長香及香、時計類及「オールゴール」、珊瑚、及物類、藥種、染具、西洋陶器、磁器、諸般家具、硝子器、金銀ノ糸并紐、ゴム類、鏡類、珠玉、機械類、鐵并銅器、絹糸、絹木綿織物、毛雜織物類、油畫并銅板、木板圖類、香具石鹼、金銀キセ并鍍金器物類、獸皮類、遠目鏡、學藝ニ用井ル器具、材木、酒類、酒精類、食料諸類、其他
次キニ輸出品運上目録モコレナ四種ニ分類シ第一種、有稅品、五十三種ニシテ五文目乃至十三文五分ノモノ尤セ多シ、第二種無稅品ハ金銀(貨幣)金銀銅ナリ、第三種ハ禁制品ニシテ米、粃、小麥、大麥并ニ其粉、硝石、等ナリ、第四種ハ五分稅品ニシテ竹器類、銅器諸類、木炭、人參、鹿茸座席類、絹衣服并織物又ハ縫箔シタル衣服、材木等ナリ。
輸出品中ニ穀物類ヲ禁制品トシタルハ徳川時代ニ於ケル經濟思想ノ自給自足ノ農業經濟ニアリシヲ示スモノナリ、又輸入品中第二種無稅品ノ範圍ヲ廣ゲ從價稅ヲ一列ニ五分トナシタル如キハ我ノ既得課稅權ノ減殺ナリ。

七

封建時代ノ要求トシテ教ヘラレタル服從の道德ハ官尊民卑ノ弊風ヲ作り、人民ニ獨立自主ノ精神ヲ

養フノ機會ヲ與ヘザリキ、コノ國民的習性ハ盛農主義ノ經濟思想ト共ニ明治ノ産業國民ニヨリテ繼承セラレタリ。徳川幕府ハ外ヨリ來ル壓迫ト、内ニ起レル政爭トノ爲メニ極メテ不利益ナル狀態ニ滅殺セラレタル稅權ヲ回復スルノ暇モナク同ジク明治ノ産業國民ニ相續セシメタリ。而シテ此等ハ明治ノ産業國民ニトリテ一ノ拘束タリ、支障タリシナリ、シカモ幕政時代ガ、コレヲノ拘束及ビ支障ヲ殘シナガラ尙、泰西文明ノ刺激ニヨリ新産業ヲ移植シ創始シテ、ソノ自ラ倒レタルノ後モ新時代ニ繼承セシメテ明治ノ産業ニ眼光ヲ投ゼリ、サレバコノ紀念スベキ新事業ヲ叙說シテ本研究ヲ終結セン。

徳川幕府ハ鎖國主義ニヨリテ國ヲ開カザリシモ西力東漸ノ大勢ハ如何トモスルコト能ハズ、該政策ノ一角ハ西南邊境ノ地ヨリ崩レテ泰西ノ文明ハ我國ニ入り來レリ。即チ嘉永六年米國水帥提督彼理ノ浦賀ニ來リテ通商貿易ヲ求メタルニ先立チテ佐賀ノ鍋島閑叟、薩摩ノ島津齊彬ハ世界ノ大勢ヲ看取シ開國ノ已ムベカラザルヲ察知セリ、カクテ、嘉永元年鍋島閑叟ハ蘭書ニツキテ製鐵法ヲ學バシメ、又反射爐ヲ用キテ大砲ヲ鑄造セリ、蓋シ長崎港口ニ備ヘンガタメナリ、而シテ相尋イデ造船、醫療、舍密(化學)等ノ技術ヲモ具セリ。若シソレ薩藩ニ至リテハ早クモ琉球ニ於テ密ニ外國ト通信通商セシモノノ如シ、而シテ嘉永三年島津齊彬モ鹿兒島城内ニ製煉所ヲ置キ藥品、砂糖、陶器ノ釉料、金銀ノ分析等ヲ試ミタリ、又小形ノ反射爐ヲモ据付ケタリシガ、ソノ場所ノ狹クシテ不便ナリシカバ五年ニ磯村ニ移シコレヲ集成館ト名ヅケ三臺ノ反鉢爐及ビ二臺ノ熔鑄爐ヲ据付ケテ大砲ヲ鑄造シ、更ニ又陶器硝子蒸餅、硫酸、燒酎ノ製造ヨリ農具、造船、器械、榨油機、器械等ノ製造及ビ綿糸ノ紡績ヲモ試ミタリ。安政三年江戸澁谷邸ニ於テ松本弘庵、川本幸民ニ命ジ蘭書ニツキテ電氣機械ヲ製造セシメ、四

年コレヲ鹿兒島ニ送リ本丸及ビ二丸間ニ電信線ヲ通シテ試用セリ。又同年松本弘庵八木彌平ニ命ジ同ジク蘭書ニヨリ石炭瓦斯ノコトヲ學バシメ、試ミニ磯村邸内ノ石塔籠ニ氣管ヲ通シテ點火セシメタリ。サレバ幕末ニアリテ尤モ早ク歐洲ノ機械工業ヲ輸入シタルハ佐賀及ビ鹿兒島二藩ニシテ、就中鹿兒島ノ集成館ハ歐洲ノ新產業ヲ我ガ國ニ輸入シタルノ功大ナリト云ハザルベカラズ。更ニ徳川幕府ニアリテモ海防上ノ必要ヨリ種々ノ施設ヲナセリ、即チ天保年中高島秋帆ノ幕命ニヨリ鐵砲ヲ鑄造セルアリ、嘉永年中韭山代官江川太郎左衛門ハ蘭書ニツキ製鐵法ヲ講究シ伊豆國賀茂郡中村字鳴瀧ニ高サ五十八尺ノ反射爐四臺ヲ据付ケ加茂川ノ水利ヲ用キテ大砲ヲ鑄造セリ。又、彼ハ人ヲ歐洲ニ遣ハシ火藥製造法ヲ學バシメ器械ヲ白耳義ヨリ購入シ慶應三年ニコレヲ府下王子村ニ据付ケタリ、コレ實ニ現今ノ瀧野川火藥製造所ノ濫觴ナリ。更ニ水戸藩ニアリテモ安政元年四月佐賀藩ニ倣ヒテ巨砲ヲ鑄造セリ。而シテ藩主徳川齊昭ハ早クモ海防ノコトニ着眼シ石川島ニ造船所ヲ建設セリ。同年十一月魯艦ノ下田ニ碇泊セルモノ海浦ノ爲メ沈没シタルヨリ戸田灣ニ入り船匠ヲ傭ヒ木材ヲ購ヒ「スクーネル」形二隻ヲ造リ北海ニ向ツテ去レリ、而シテコノ偶然ノ出來事ニヨリテ洋式造船術ノ智識ヲ得タル船匠等ガ多クハ後ニ幕府海軍所附屬トナレリ。又水戸藩ニアリテハ同年八月荻浪之助菊地富次郎ヲ長崎ニ遣ハシ蘭人ニツキテ造船術ヲ學バシメタリシガ、魯人ノ戸田灣ニ入りテ造船ノ事アルヤ石川島造船所ヨリ船匠ヲ遣ハシテソノ方法ヲ視察セシメタリキ。安政四年幕府ハ肥前國浦上村淵字飽浦ニ於ケル製鐵所ノ建設工事ニ着手シ、文久元年ニ竣工セリ、而シテソノ前年ニ同村淵字立神ニ修船渠ヲ建設スルノ計劃アリシモ果サズシテ幕府自ラ倒ル、ニ至レリ（該計劃ハ明治政府ノ繼承スルアリテ明治七年ニ着手シ

十二年五月ニ竣工セリ。又幕府ハ多艱多難ノ時ニアタリ尙永井岩之丞ノ建議ヲ容レ、元治元年相摸國横須賀村ニ一大船渠建設ノ計劃ヲ立テ慶應二年三月佛人ヲ傭ヒテ工事ニ着手セリ、實ニ小栗上野介ノ勇斷ニ出デタリ。次イデコノ年十一月武藏國横濱本村ニ製鐵所ノ分築ヲモ計劃セリ、而シテ兩ツナガラ竣工スルニ及バズシテ明治新時代ノ繼承スルトコロトナレリ。

如斯、幕末時代ニアリテ輸入セラレタル洋式機械工業ノ多クハ國防ニ關スルモノニシテ製砲、造船ハソノ主タルモノナリキ、而シテソノ純乎タル生産工業ニ至リテハ未ダ實用的ノ域ニ進マズ肥薩等ノ少數ナル諸藩ニヨリテ試験的ニ小規模ニ行ハレタルニ過ギザリシナリ。シカモ明治ノ新産業ノ前驅ヲナスモノナレバソノ發達史上ニ重要ナル地位ヲ占ムルモノタルヤ疑フベカラズ。

(大正七年二月二十一日推敲)